

野球やれる喜び 伝える

元プロ・原井さん 箕島球友会コーチ就任



箕島高校OBの元プロ野球選手原井和也さん(44)が今年、有田市の社会人野球チーム「和歌山箕島球友会」のヘッドコーチに就任した。プロではどこでも守れて、代打も代走もこなせる選手を目指した。5年前に野球界から離れた後は、約3年間の会社勤めも経験した苦労人だ。「野球をやれる喜びを若い選手たちに伝えたい」と意気込んでいる。

チームの拠点のマツゲン有田球場(有田市)で10月中旬にあった守備練習。投手と一塁手が間に転がった球を2人で追いかけて、ベースカバーが間に合わなかった。

「自分が捕るんだ、という気持ちはいつも持っていてほしい。だけど、それに加えて連絡が必要なんだ」。頭ごなしに怒鳴るのではなく「なぜそんなのか」を穏やかな口調で説明しながら基本の大切さを説いた。

由良町出身。小5のときにテレビで見た甲子園春夏連覇にあこがれ、故尾藤公監督率いる箕島高校に入学した。同級生の部員は約40人で、2年上には後に阪神からドラフト1位指名された嶋田章弘投手がいた。最初はボール拾いからのスタート。父春己さん(72)が見守る中、毎晩のように家に帰ってから綱登りなどの個人練習をして力をつけ、1年秋から正選手に。松下電器(現パナソニック)を経て、1995年に西武から5位

若手選手に送球方法をアドバイスする和歌山箕島球友会ヘッドコーチの原井和也さん(有田市宮崎町)

妥協しない姿 選手ら奮起

指名された。強肩や俊足が売りのだった。

だが同じ内野手だった松井稼頭央選手の走塁や守備に「これは別格だ」と感じた。プロ1年目で戸惑っていた原井さんに、箕島の先輩だった東尾修監督が声をかけた。「いろんな守備位置を守る選手を目指してみな。そういふ選手はチームに絶対必要なんや」。本職は内野手だが、外野も練習した。守備固めや代打、代走もこなした。

自分の出番がなくても、ベンチ裏での準備は欠かさず、自分の役割を必死で探した。西武・ロッテで10年間ユニホームを着続けた。

2007年に西武の守備走塁のコーチ補佐を退任したあと、野球界から離れた。「体を使う仕事でなければ動まらないのでは」と考え、運送業界に就職し約3年間働いた。元プロ野球選手といえども、会社では新入社員。年齢で上下関係が決まる球界との違いにも戸惑いながら、年下の先輩に教えを請うた。4人下で先輩を運転し荷物を運び、飛び込みで営業に走り回った。野球のことを考える余裕はなかった。

ボールクラブ」。知人に誘われ、2011年の1シーズン、

コーチを務めた。選手を教えながら「やっぱり野球は楽しい。自分の中でくすぶっていた『野球をやりたい』という気持ちが爆発した」という。チームの本拠地の移転のため退任したが、「なんとか野球を続けたい」と思った。OBのつてを頼り、今年1月に球友会に入団。球団を運営するNPO法人の職員として球場管理などの仕事をしながら練習を見ている。

「野球がやれることが何より楽しい」。守備練習では1時間以上ノックを打つこともあるが、表情に笑みが絶えない。全体練習が終わったあとも、毎日のように選手の練習に付き合っている。西川忠宏監督(52)は「いったん教え出すと止まらない。野球に対する情熱がすごい。消灯まで練習に付き合う姿を見て、『プロでやるにはここまでやらなければならないんだ』と知り、自主練習をする選手が増えた」という。

原井さんは「野球以外の仕事も経験して、野球ができる喜びを改めて感じた。選手たちにはこの喜びを感じながら、妥協せずに練習して強くなってい」と話す。

(山野拓郎)